

小特集・谷川俊太郎の詩を読む

現代詩を牽引し続けた詩人、谷川俊太郎（一九三二—二〇二四）。その言葉は、デビュー作『二十億光年の孤独』から晩年の作品に至るまで、常に澄明な響きと深い思索を宿してきました。日常のささやかな出来事から、生と死、宇宙といった形而上的なテーマまで、幅広い表現を試みました。この小特集では、詩作にとどまらず、絵本、作詞、翻訳など多岐にわたる活動を通して、日本語の可能性を切り拓き、私たちの文化的領域に豊穡をもたらした谷川俊太郎の「言葉の宇宙」を、自由な視点で読み解いてみます。彼の織りなす詩篇は、今を生きる私たちに、世界の多面性と、自らの存在を見つめ直す静かな機会を与えてくれるでしょう。

宇宙の〈寒さ〉を知ってるひと

池上貴子

詩人の独特な視点と優しい語り口による素朴な疑問への応答は、やがて書籍『谷川俊太郎質問箱』（二〇〇七年八月、東京糸井重里事務所）にまとめられたのだが、その質問の中で、今も忘れられない回答がある。

どうして、にんげんは死ぬの？／さえちゃんは、死ぬのいやだよ。

かつて糸井重里が運営するウェブサイト「ほぼ日刊イトイ新聞」*に、谷川俊太郎が質問コーナーを連載していた。

幼い娘に聞かれて困った母親からの代理質問に、谷川はこう答えた、

ぼくがさえちゃんのお母さんだったら、／「お母さんだって死ぬのいやだよー」／と言いなから／さえちゃんをぎゅーっと抱きしめて／一緒に泣きます。／そのあとで一緒にお茶します。

谷川は母親に、「こういう深い問いかけにはアタマだけじゃなく、／ココロもカラダも使って答えなくちゃね。」と、さらにアドバイスをするのだった。「死ぬ」という誰もが避けたくても避けられない、どうにもならない生き物の宿命について、谷川俊太郎の詩人としての処し方が何となく感じ取れる。

「なぜ人は死ぬのか」という問いへの回答にならない回答は哀しくもあり、しかし谷川俊太郎でもやはりわからないのかと、人間の一員として「一緒にお茶」をするしかないことに妙に安心もしたのだった。思えば谷川俊太郎は、遠いような近いような不思議な言葉を地球に置き土産にし、同じ人間として宇宙人に自慢したくなるような詩人だった。とはいえ、回答できない難問（アポリア）は、放置されてきたわけではない。たとえば今回扱う『トロムソカラー

ジュ』（二〇一六年十月、岩波書店）の表題作「トロムソカラージュ」では、一行目から「私は立ち止まらないよ」と宣言がされる。この力強い言葉は、都度リフレインしていくのだが、なぜ立ち止まらないのか、立ち止まるとどうなるのか。時にその言葉は「立ち止まれない」と悲痛に変異する。この宣言には様々な解釈があるだろうが、冒頭で述べた人間が死ぬといったような、（どうにもならない）こ（難問）^{アポリア}に深く関与しているようだ。

だって立ち止まれないじゃないか／時が一瞬一瞬まばたきする間もなく過ぎていくから／じつとしてたつて私は動き続けている

仕方がない どうしようもない どうするすべもない／しかしどこへむかって動いているのか？／知りませんよそんなこと／いつも元気な宇宙さんに訊いておくれ

この詩において（どうにもならない）と受け止められるのは、「宇宙」という言葉に含まれる法則性、時空にまつわる巨大なシステムであり、その中で個として存在するかどうか。宇宙という空間は物理的時間の中で動き続け、個は「立ち止まれない」ままに、気づかずに動かされ、流